

書 評

上田晶子、『ブータンにみる開発の概念—若者たちにとっての近代化と伝統文化』明石書店、2006年、368p.

岩間春芽*

本書は開発学を専門とする上田晶子氏が、開発学の理論と、ブータンの若者への調査結果および政府の開発政策の文書の言説分析から、ブータンの人々（主に若者）および政府が「近代化」と「伝統文化」についてどのように考えているのかを論じたものである。本書は著者がロンドン大学アジア・アフリカ学院に2001年に提出した博士論文を元にそれを自ら日本語訳し、出版したものである。

まず、本書の概要を示す。「第1章 序」では著者の問題意識や分析の鍵概念、ブータンを調査地とするまでの経緯や意義、本書の構成が書かれている。本書全体の問題意識は「人々が開発や近代化、そして自分たちの伝統や文化をどのようにみているか」である。

「第2章 開発学理論の系譜」ではまず、近代化論や「開発の多様な選択肢」アプローチなどに触れたうえで、著者の「第三世界に住む人々は彼ら自身の文化や開発についてどのように考えているのだろうか」という問題意識に即した形で、一連の開発理論のレビューを行なっている。表象やオリエンタリズム、オキシデンタリズム、多層的言説、グローバル化などの鍵概念ごとにレ

ビューを行なったうえで、言説分析をするうえでブルデューの理論的枠組みに注目し検討している。本書の全体を通しての分析は主にドクサ、正統性、非正統性（異端）という概念からなる枠組みによって行なわれている。著者によると、ドクサとは「確立された宇宙や政治的秩序が横暴なものとは知覚されず、自明で当たり前ととられている状態（p. 50）」である。そして「自然の秩序や今まで当たり前のものでとらえられてきた事実疑問が呈されたとき、社会は自然な現象としての性格を失い、ドクサは「正統」と「異端」からなる『言説の世界』へと変貌するのである（p. 50）」。著者はこの枠組みを用いた理由として、行為者の主観をみることで、さまざまな見方が競合している状態をみることで、そして言説が生産される社会的背景を分析することが必要であるという3つの理由をあげている。また、ブルデューの枠組みの特徴として、言説の変化を検討することを可能にすること、そのことによりフーコーの研究のような覇権的な言説が支配しているという図ではなく、さまざまな見方や疑問が表現され、「議論に上がっていない部分」までも検討できるようにするということをあげている。そしてこれらのレビューの後にブータンの概観が加えられ、本書の背景を示すとともにブルデューの分析枠組みをブータンの文脈に当てはめて検討している。

「第3章 フィールドワーク」では著者がフィールドワークの間におかれた場所と文脈を明らかにし、ブータンの人たちが著者をどのように捉え、著者が自分自身の存在をどの

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ようにみたかについて述べている。ここで、ビザを獲得するまで時間がかかったこと、調査期間が1年間であること、調査が英語で、さまざまな学校を訪問しそこでの聞き取りによって行なわれたこと、調査者である著者が日本人であるということで調査が比較的円滑に進んだということなどが書かれている。

「第4章 開発政策における伝統文化」においてはブータン政府の開発の概念を理解するべく、経済開発の概念とブータンの開発概念の比較をしつつ、開発計画の開始時から開発政策のレビューを行なっている。更にブータン政府の政策の特徴である伝統文化の保護や自立、宗教や文化も含めた持続可能な開発、国民総幸福量についても詳細に述べられている。ブータンは1961年に開発計画を開始し、当初は経済開発を主とするものだったが、その後伝統文化の保護や自立など他国にはみられない政策を行なってきた。ブータンの開発は一言でいうと「近代的な生活様式の導入とブータン人としてのアイデンティティを守ることのバランスをいかにとっていくかという終わりなき探求 (p. 115)」である。これらに加えて本書で実際に調査を行なった若者に直接関係する教育システムやその特徴が紹介されている。

「第5章 西洋化と伝統文化」においては3つの教育システム（英語教育、ゾンカ語教育、僧院教育）の中で教育を受けているブータンの若者たちへの調査を元に、多層的言説の背景を叙述したうえで、ブルデューの理論的枠組みに沿ってそれらを検証している。ブータンにおいてはエリートになるための

「成功の階段」に登るには英語教育を受けたほうが有利であり、ゾンカ語教育は不利である。しかし英語教育を受けている若者たちは年長の世代にブータンの伝統文化を忘れ始めっていると批判されているため、経済資本と社会関係資本は保有しやすいが文化資本は欠いているとみられる。そのため著者は、英語教育を受けた若者たちの見方を「異端Ⅰ」、ゾンカ語教育の若者たちを「異端Ⅱ」、エリートでありながら伝統文化の保護に熱心な新伝統派の見方を「正統Ⅰ」、「成功の階段」とは異なるプロセスの中にありながらも特別な位置にある僧侶を「正統Ⅱ」と位置づけ、それぞれがそれぞれの資本のために対立し、闘争していると論じている。それぞれが異なる見方をもつが、ブータンの伝統文化に対する尊敬は皆が共有している。新しい「正統」は英語教育を受けた人々に都合の良いようにつくることにより彼らの立場を強化しているが、それでも政府は「文化意識」のドクサを守らなくてはならないという状況にあり、伝統文化の保護政策はこのドクサを明示したものである。

「第6章 結び」においてはグローバリゼーションの理論的文脈においてブータンの開発言説の土着化、西洋の開発言説の影響、そして結論が述べられている。結論において著者はブータンにおける言説は西洋の開発言説と共有している部分があるものの、それぞれの行為者が競争し「交渉する」という土着のプロセスが働くことによって異なる開発言説が生み出されていると述べている。そしてこれを西洋の開発言説の亜種とみなすことの

危険性を指摘し、ブータンの開発言説は西洋のそれとは異なるものであるということを示唆している。ブータン政府の開発政策の特徴である伝統文化の保護政策があるおかげで、伝統文化の保護は社会の中で多くの注目を集め、議論的となっている。そしてこのドクサを維持している要因はブータンの地政学的位置に大きく起因している。

次に、本書全体についての考察を行なう。まず、本書全体の論じ方について述べたい。本書では特に第2章において先行研究の理論の整理が集中的に行なわれ、著者の立場が示され、その後の章でその枠組みに添った形で分析が行なわれている。著者が比較的新しく、さまざまな論者の多岐にわたる議論を見渡したうえで整理して論じている点は評価できる点である。ただ、著者がいう「開発学」がアカデミックな議論が出来るほど体系化されたものなのかについては疑問が残る。ある程度体系化された蓄積を踏まえたうえで、それに付け足す形で議論を進めないと著者の主張が不明確であやういものになってしまう。また、「多層的言説」は本書の中で何度も使われる重要な用語であるが、定義が明示されていない。この用語に関する文献として本書であげているピグらの研究は論文の中で直接「多層的言説」という用語を使っていないことから、ピグらの研究を「多層的言説」の文献であると断定できるのかという疑問も残る。つまり、本書全体を通して論じるという点においてやや不明瞭な感じを受けざるを得ない。

本書の調査に関しても考察したい。本書は

調査に関して第3章で、あえて章を設けてきちんと叙述している。この点は、80年代のクリフォードらの民族誌批判を理解したうえで乗り越えようとしたという意味で評価できる。ただ、著者も認めているように本書の調査対象は都市部の何らかの学校に通う若者に限られ、農村部の学校にあまり通わず農業に従事している若者は対象から外れている。こういった若者は援助機関の開発言説の中でしばしば「最も開発を必要としている人たち」であるとされているため、調査対象から外れてしまったことは残念である。更に調査が主に英語で行なわれたことから、英語が使えるレベルの教育を受けた人たちが主な調査対象者となってしまったことから調査対象者が限られてしまったのではないと思われる。ピグらの研究によると、同じネパール人の中でも農村や都市などの住む地域による違いや、同じ農村の中でも開発を仕事とする人たちとそうでない人たちとの間で「開発」観は異なる。よって、このような多様性をブータンにおいてみるためには、ゾンカ語やその他の言語による農村での調査が行なわれ、それによる論考がなされることが今後期待されるのではないだろうか。

次に、本書全体をネパールとの比較という点で考察したい。本書はブータンについて書かれたものであるが、「開発をどのように捉えているのか」という点についてネパールとの比較という視点で読むと大変興味深い。ブータンとネパールは南アジアのインドと中国という2つの大国に挟まれた小国であるという共通点をもちながらも、全く異なった

開発政策を行なっているからである。端的に述べると、ネパールは外国からの援助を受け入れざるを得ない状況の中で長い間多くの援助を受けてきた〔西澤 1987: 319〕。一方ブータンは政府の強いオーナーシップの下、外国からの援助を厳選して受け入れ、自らの独自性を繰り返し強調することで、アイデンティティの維持と国家の生き残りを目指している (p. 345)。こういった状況の中でネパールにおいてはピグヤストーンなどの人類学者により住民の開発の捉え方に関する研究が行なわれてきた。彼女らの研究と本書を比較してみると、ネパールでは援助機関の言説を内面化する一方、援助機関の思惑とは別に、開発を自らの仕事の機会として、あるいは「外から来るもの」として全体として受動的な姿勢で捉えるという現象が起こっている。そして本書によると、ブータンにおいて開発は「近代的な生活様式の導入とブータン人としてのアイデンティティを守ることのバランスをいかにとっていくかという終わりなき探求 (p. 115)」であり、「近代化」と「伝統」との間でさまざまな議論がなされているが、どのような層においても「伝統」は肯定的に捉えるべきであると考えられているのである。このようなブータンの姿勢は全体として能動的であるといえよう。同じような地政学的位置にありながらもこのような全くといってよいほど異なる開発の捉え方がなされていると

いうことは大変興味深い。

全体を通していえることは、ブータンの人々が開発や近代化、そして自分たちの伝統や文化をどの層においても西洋の開発言説と共有している部分はあるものの、それとは異なる形でみているということである。特に「高い文化意識を持つこと」というドクサがある点が西洋の開発言説と大きく異なる点である。こういった興味深いテーマを追求したという点で本書は高く評価できる。ただ、本書全体を通してさらりとした印象を受けるのも事実である。これは調査期間の短さや調査での使用言語、「開発学」という理論的枠組みの危うさが影響しているように思える。今後調査研究を継続し、これらの点を乗り越え「厚い記述」となったものを是非拝読させていただきたい。

引用文献

- 西沢憲一郎. 1987. 『ネパールの社会構造と政治経済』勁草書房.
- Pigg, Stacy Leigh. 1992. Inventing Social Categories through Place: Social Representations and Development in Nepal, *Comparative Studies in Society and History* 32: 401-513.
- . 1993. Unintended Consequences: The Ideological Impact of Development in Nepal, *South Asia Bulletin* 13: 45-58.
- Stone, Linda. 1986. Cultural Influences in Community Participation in Health, *Social Science and Medicine* 35: 409-417.